



LA NOUVELLE

N°20 PRINTEMPS

東京外語協会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10

本郷サテライト 東京外語協会付

発行責任者 藤倉洋一 (昭45)

2018.4.1 発行

第23回サロン仏友会

恒例のサロン仏友会が、秋晴れの11月21日(日)本郷サテライトで開催された。出席者は58名。今回の講演会講師は外語卒業生としては異色の経歴を持つ精神科医師・久山なぎささんで、全員興味津々で講演に聞き入り、大好評を博した。続く、懇親会でもボジョレ・ヌヴォによる酔いも手伝ってか、講師への質問が限りなく続いた。そして人の結びつきの有り難さを感じる和やかな集いとなった。以下に、久山さんによるまとめの投稿をご披露する。今後、更なるご活躍を期待したい。

精神科医になることは私にとって必然だった

久山なぎさ (平7)



「医学部を受験することにした」2006年の11月、私は南米ウルグアイにいた両親に国際電話をかけ、そう告げました。それまで「医者になりたい」と言ったことは一度もなかったのに、国際電話の向こうで、両親は驚いていました。「外語を卒業して精神科医になった」と言うと、不思議な経歴のように見えます。でも私の中では自分の興味を全て満足させるのは精神科医という職業であり、それまでの経歴を考えると精神科医しかなかったと思います。

《憧れのユネスコへ》

私は語学が好きだったので外語に入学しました。外語の4年間は本当に楽しかったです。フランス語、語劇、空手、と外語は私の青春でした。でも一方で「将来自分は何をしたいのだろう」と考えていました。「哲学を勉強すればわかるかもしれない」と考えて、哲学科を再受験しようとしたこともありましたが、父に「哲学以外のことを勉強してもわかるのでは」と言われて、受験はしませんでした。

「では大学を卒業したら何をしよう」と考えました。「海外でフランス語を使って働きたい」「人に教えることが好きなので教育関係が良い」と考えて、パリにある国連の専門機関であるユネスコで働こうと思いました。私は修士号を取得して、ユネスコの教育局で働き始めました。教育局では、途上国の識字教育を担当しました。識字教育というのは、文字の読み書きができない人に、教育を施す仕事です。私の担当はアフリカや中東のフランス語圏で、現地の人が使う冊子を作ることになりました。



懇親会風景

冊子は、現地の人のニーズに合わせて、例えば、学校に行くことの重要性といった内容にしました。専門家に挿絵と表紙を作ってもらいました。最初は、パリで、フランス語と英語を使って働いている自分というのが、誇らしく、嬉しかったです。

でも次第に疑問が浮かぶようになりました。現地を調査したわけではなかったので、果たして冊子の内容が現地の人々のニーズに合っているのかわかりませんでした。また冊子が現地で使われているのかも、知りませんでした。さらに「教育は成果が出るのに1世代かかる」と言われます。目に見えた成果を実感できたわけではありませんでした。そうした疑問を持つうちに、「ここで一生働きたいのだろうか。それで幸せなのだろうか?」という考えにつながっていきました。

《脈脈を求めて》

そのような時、夏目漱石の「私の個人主義」という本に出会いました。その中で漱石は次のように言っています。「突き抜けたくても突き抜けるわけにもいかず、なまここのようなぼんやりとした精神を抱いては自分が不愉快だ。ここに自分の進むべき道があった、ようやく掘り当てたと言えるまで、自分のつるはしをがちりと脈脈に掘り当ててまで突き進みなさい」これを読んで、「私はまだ自分の脈脈を掘り当ててはいない」と思いました。私はユネスコの契約が終了したのを機に帰国しました。でも帰国後も仕事はなく、相変わらず「自分は何をしたいのだろう」と考えていました。

スクールカウンセラーの妹に勧められて精神科医の神谷美恵子さんの日記を読んだこともあります。語学に携わりたいと考えて、フランス語の翻訳や通訳をしたりしました。でも、契約が終わった後、どれも更新をしませんでした。

《医者を目指す》

そのような時、私はアレルギー性鼻炎が悪化して、入院して手術を受けることになりました。初めての入院でした。同じ病

室には、他の患者がいました。大音量でテレビを見ている人がいて、「なぜだろう」と思っていたら、その人は耳が聞こえませんでした。また、私が入院するはるか以前から入院している人もいました。そうした人々を見たことは、私の心の中に何か残っていたのかもしれませんが。手術は無事終わり、退院しました。

退院して外に通っていた、その帰り道のことでした。すでに日は暮れて真っ暗でした。病院の前の横断歩道を渡ろうとした時、ふと「医師という職業は?」という考えが浮かびました。

日が経つにつれて、その思いは強くなっていきました。そして気が付いたら問題集を買って勉強を始めていました。医学部には社会人を対象とした学士編入制度があります。それで受けよう決めて、大学から願書をいくつも取り寄せました。

ウルグアイに住んでいた両親に電話したのは、その頃でした。当時の私は医師になることがどれほど大変なのかわかっていませんでした。また医者という仕事もよく知りませんでした。でも「自分は医師になるのだ」と確信していました。

《人の人生に関わる仕事》

暑い夏の盛り、私は全国を回って医学部を受験しました。何が私を突き動かしていたのでしょうか。自分の意思ではなく、すでに決められた道をたどっていった、そのような気がします。そして私にとって医師というのは精神科医のことでした。

なぜ精神科医になったのでしょうか。哲学や思想に興味を持っていたということもあります。また大好きなフランス語は精神医学の分野でも使うことができます。でも一番大きな理由は、自分が今まで生き方に迷っていたので「人の人生に関わる仕事に就きたかったから」だと思います。

精神科医になって、人間というのは興味の尽きない対象だと思います。こういう仕事を一生の仕事にできたことはとても幸福です。そしてこの道に進むことを許してくれた両親に心から感謝しています。



懇親会場の準備風景

南仏の旅～アーティスト達の足跡を辿る (その3: コートダジュール編)

椎名隆一 (昭57)

一昨年の秋の南仏旅行の際、コートダジュールにも足を延ばしてみました。まず、思い切ってイタリアの国境近くのMentonまで行き、そこから地中海沿いに西進しRoquebrune Cap Martin (以下R.C.M)、Monaco、Ezeそれぞれの



地を巡りながら最後にNiceに至るという行程でした。何度も訪れているNiceを除き、いずれも初めての訪問となった他の4都市では、それぞれの魅力に触れることができました。これらのうち、R.C.MとEzeは中世において、いわゆる鷲の巣(nid d'aigle)村と呼ばれる山の上に城塞都市として発展した町ですが、Ezeはおそらく地中海沿岸では最大の鷲の巣村で、五つ星ホテルChâteau de la Chèvre d'Orや、城塞の最上部に広がる異国風庭園(jardin exotique)など見どころが沢山。ただ、観光地化されすぎて、朝から外国人観光客が押し寄せ、静かな雰囲気にはたるとはできませんでした。逆に、Mentonの西隣に位置するR.C.Mは、Ezeほどの規模はないものの、観光客も少なく落ち着いた雰囲気に満ちています。SNCFのR.C.M駅のある海岸近くから1時間ほどかけて山の上の城塞(10世紀建立)目指して登っていきましたが、途中、住民の方に呼び止められ、自宅の中庭から素晴らしい地中海の景色を鑑賞させていただきました。山の一番上まで階段を登りきるとさすがに足が棒のような状態になりましたが、さらに素晴らしい地中海と、坂道に連なる中世の村(village médiéval)の眺望が開けます。短時間の滞在となった次のMonacoでも、60mの岩山の上に建つ大公宮殿(Palais Princier)まで行って、Monte Carlo地区や港の眺

望を楽しみました。

さて、はじめに訪れたMentonについて少し詳しくご報告します。ここは毎年2月から3月にかけて開催される地元特産のレモンの収穫を祝うレモン祭(fête du citron: 1934年からスタート)が有名ですが、Jean Cocteau (1889 - 1963) ゆかりの地として彼の作品といたるところで出会える町でもあります。もともとレモンの栽培と漁業しかない貧しい村でしたが、1880年代から避寒客が次第に訪れるようになりフランスのリヴィエラとして観光地化が進みました。特に、イギリス人観光客の人氣が高く、またロシア貴族も避寒地として別荘を建てるようになりました。19世紀末から二つの世界大戦にかけては、奇抜なパーティや仮装舞踏会など「狂おしき時代(des années folles)」と呼ばれる享楽と狂騒が咲き乱れる町となり、Auguste RodinやFranz Lisztなど多くの芸術家もやってきました。戦後になると、パリで詩人、小説家、劇作家、画家、映画監督などあらゆる芸術の分野で時代の寵児となっていたJean Cocteauも、Parisの喧騒から離れ、知人の招きでこの町を訪れるようになりました。ここでアトリエを構え、資産家の友人の別荘や、市庁舎の内装、Villefranche-sur-MerのSaint Pierre 礼拝堂の壁画などを手掛けました。特に、Menton市庁舎内の婚礼の間はSalle des Mariages de Jean Cocteauと呼ばれ、壁や天井一面に描かれたCocteauの幻想的な世界が鑑賞できます(写真)。また、彼は、海辺の要塞を、彼の専用の美術館(Musée de Bastion)とすることを発案し、若いころのパステル画作品を展示。また、近年(2011年11月)には、Cocteau作品の収集家として知られるSéverin Wunderman氏の寄贈による第2のCocteau美術館(Musée Jean Cocteau)がオープンし、彼のデッサン、写真、映像など多様な作品が展示されています。

なお、Mentonの丘に広がる旧市街(vieille ville)は、坂道に黄色やオークル色のバロック建築風の家々が立ち並び、また、17世紀に建てられたEglise St-Michelの威風堂々とした姿が印象的。この丘の上から見下ろすイタリアへとつながる碧い地中海も素晴らしい眺望でした。

第23回仏友会総会のお知らせ

日時: 2018年4月21日(土) 午後2時~5時
午後2時~総会、2時30分~講演
3時40分~写真撮影&懇親会

会場: 大手町サンケイプラザ201・202号室
(東京メトロ大手町 E1出口)

講師: 谷川徹三氏(平12) 弁護士(東京外語協会幹事)
演題: 「今知っておくべき『さしすせそ』」



谷川氏は東京都出身。卒業後弁護士を目指し、2009年弁護士登録。13年には新橋IT法律事務所を設立し、第二東京弁護士会高齢者・障がい者総合支援センター「ゆとり~な」相談員でもあります。

とかく事件の多い昨今ですが、その中でも我々に身近な関心の高い5つのテーマについて解説をいただくとともに、もし自分が当事者の場合、法律も含めどのように対処すればいいのかを、伝授いただきます。

外語仏語卒の新進気鋭の弁護士による、とてもためになるノウハウのご披露です。ぜひお誘いあわせの上お出かけください。

参加費: 5,000円

2018年度分通信費1,000円も同時に受け付けます。

申込み: 4月13日(日)迄

メルアド保有の登録会員にはe-mailで、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。

申込み先: 藤倉洋一: fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子: anzuko@k08.itscom.net

20号特別記念号

「LA NOUVELLE」は今回第20号を迎えました。これを記念し、特別企画として6人の方に、フランスやフランス語に関わるエッセイの執筆をお願いしましたので、2面と3面に掲載します。

マクロン大統領の兵役復活政策案を巡って

沼田睦子 (昭44)



フランス革命後の第一共和政下、革命が惹起した周辺諸国との戦争のさなか発令された「国家総動員」(1793/8/23)がフランスにおける徴兵制度の嚆矢とされ、以降、帝政、再び王政、第二共和政、第二帝政、第三共和政と政体が変遷するなか、根拠法がさまざまに改変されるが、20世紀初頭には「20歳に達した全フランス男子に平等に兵役を課す」原則が樹立されている (loi Berteaux : 1905/3/21)。

その後、第一次、第二次世界大戦、さらに第四共和政下のアルジェリア戦争を経る期間、戦時平時に応じて召集年齢が上下し、兵役期間が増減し、ドゴール将軍が政権に就いた第五共和政下1965年には「service militaire 兵役」から「service national 国民役務」と呼称変更、さらに、軍務以外に、相応な学歴があれば国や地方自治体の公務支援、海外協力等による代替役務が制度化された (loi Messmer : 1965/7/9)。

因みに、1990年代末まで、母校フランス語学科に赴任してきた外国人教師は、この代替役務制度に拠って、兵役に就く代わりに外国でのフランス語教授活動を選んだフランス人である。

私事に亘るが、夫は独身の1970年代前半に、情報工学エンジニアの資格を以って陸軍参謀統計局で事務職18か月の代替役務に就いたが、初めの1か月は入営、軍事教練が義務付けられた。5~6メートル程の高みから飛び降りる訓練中、着地姿勢で肋骨を両膝で強打して負傷、陸軍病院に収容された。軍病院

は常時、野戦体制にあり、手術には麻酔剤を最小限にしか使わず、幸い夫の負傷は手術の対象ではなかったが、入院中、病院は手術患者の叫喚地獄だったそうだ。小型機関銃の操作も課された。腰を構えずに発射すると身体が後方に飛ばされるほどの衝撃だった、と聞いている。銃器の操作が習えるのは結構ではないか、などと周囲の者が言おうものなら激昂した。兵役、とりわけ軍事教練期間中、教官との精神的軋轢でもあったのか、以降、軍事一般に敵意を抱き、7月14日シャンゼリゼ軍事パレードのテレビ中継など完全無視である。兵役の持つ否定的効果の一面を見る思いがする。

18世紀末以来200年も続いてきた、成人男子を国家奉仕に召集するこの制度は、しかしながら、兵器の高性能化がもたらす運用技術の高度化等、国防の現状は軍人の専門職化こそ肝要、もはや徴兵制は無用、というシラク大統領の提案を受けて1997年10月21日国会を通過した国民役務改革関連法に拠って終わる。この時点での兵役期間は10か月、代替役務は20か月になっていた。

同法施行後、調整期間を経て2002年には軍隊に徴収兵の存在は皆無となった。私の長男は徴兵検査が義務付けられていた最後の年齢に当たり、高校在学時、指定の兵営に出頭した。試験にはハイテク兵器操作シミュレーション装置内での知的身体的耐性検査もあり、かつての日本なら甲種合格か、好成績を収めたとかで興奮して帰宅、様子を語ってくれたが、大学卒業までの応召猶予期間中に徴兵制が停止されたため兵役には就かずに終わった。

同時に同法は、それまでの兵役に代え、男女共対象に18-25歳の間に「国防準備召集日」なる1日の研修を義務付けたが、これも2002年に本格的施行に至った。国防省の施設で軍人教

官から、国防の機構と、主に映像資料による国際情勢概観を基に国防の必要性について講義を受ける。

徴兵制を停止し、冷戦後の言わば括弧付き平時を国内では享受していたフランスを、2015年の年明け、パリのシャルリ・エブド襲撃事件が震撼させる。イスラムテロ犯がホームグロウンだったことに危機感を抱いたオランド大統領が、18-25歳のフランス国籍の男女を対象に6か月のservice militaire volontaire 志願兵役制を創設、国防省の管轄で、制服着用の入営生活、身体鍛錬、公民精神育成、職業訓練を課すが、軍隊要員の養成よりは、何らの技能も修得せずに学校教育年限を越えてしまった若者を社会的落伍者にせず職業社会に導入する目的が優先している。実際、軍に入隊するのは修了生の5%に過ぎない。

以上が、大統領選公約で18-21歳の全フランス人男女に1か月のservice militaire obligatoire et universel 義務的包括的兵役制復活を掲げたマクロン登場の背景である (大統領就任後、3~6か月のservice national et universel に訂正)。世論は70%が賛成だが、国会や行政当局では、徴兵制の実質的停止後15年、国防省における物的人的インフラの消滅、上院試算に拠れば当初5年間に300億ユーロの膨大な経費の発生、を主たる理由に実現可能性を疑問視する声が多い。兵務より公民連帯意識育成に軸足を移した答申を準備中の国会諮問委とマクロンの攻防も報じられている。

パリ大学哲学修士でもあるマクロンは、20世紀後半を代表する哲学者故ポール・リケールの愛弟子で、「対立し矛盾する見解をひとつの計画にまとめて社会を機能させよ、リケールの政治哲学は私にそう教えた」と回想する。信念を大胆不敵に貫こうとするマクロンの兵役復活案の行方や如何に。大統領府の政策決定は4月末と言われている。(筆者はパリ在住)

ウィークエンド・パリの思い出

佐藤寿美 (昭46)



私は84年から87年の3年間、特派員としてパリに駐在しました。当時のNHKパリはヨーロッパ総局といって、西ヨーロッパから旧ソ連や東欧圏そして中東・アフリカまで、広大な守備範囲を持っていました。チェルノヴィリ原発事故、エチオピアに始まったアフリカの飢餓、パリの連続爆弾事件、ジュネーブとレイキャビクでの2度にわたる米ソ首脳会談といったニュースで、記者特派員と走り回りました。私は番組制作ディレクターですから、硬軟様々な番組も作りました。遠くからダイアナ妃に拝顔したり、パリコレでカトリーヌ・ドヌーブさんのすぐ傍に座ったり、ジャンヌ・モローさんのインタビューに立ち会ったり…美女と言えば、岸恵子さんと作った「ウィークエンド・パリ」という衛星放送、週1回の定時番組のことが今も懐かしく思い出されます。

86年暮れのことだった。「ドラマではないのですが、毎週1回のパリ発のナマ放送番組でキャスターをおやりいただく…」私の口上が終わらないうちに、「今キャスターって言ったわね。テレビキャスターよね。一回やってみたかったのよ」と岸恵子さんがおっしゃった。お会いして5分後に決まってしまったキャスターだった。「87年4月からのパリ発ナマ放送番組を開発し

てくれ」との東京からの注文。同様の指示を受けた米国ニューヨーク支局は、歌手の郷ひろみさんをキャスターにするという。それだけでも話題になるだろう。2年前にスタートした衛星試験放送は受信者がなかなか増えないなかで、89年には本放送として受信料をいただくチャンネルにしなければならない。その意味でパリ発の番組も世間の注目を浴びる必要があった。大女優の岸恵子さんがキャスターのナマ番組、話題性はできた。しかし一体どんな番組にするのか…

セーヌ川に浮かぶサン・ルイ島はそこからパリの歴史が始まったといわれる島だ。石造りのアパートマンが並ぶ古色蒼然の街。迷路のような石畳を歩きながら、私は岸恵子さんが書いたエッセイ集『巴里の空はあかね雲』を思い返していた。若き日の女優岸恵子さんが映画監督のイヴ・シアンピさんと出会い、パリに渡り、子どもを産み、やがて離婚し、そしてシアンピさんが亡くなるまでを綴った文章。その一篇一篇が光を放っていた。驚いた。この人は作家だ。物書きの眼で人と時代を見ていると感じた。お会いしたばかりの岸恵子さん。明るく率直に話される表情にあのエッセイと同じ様に光る個性を感じた。この番組は彼女のトークを生かすければ面白くなるだろうと予感した。

1時間のナマ番組のメインは「岸恵子のビッグインタビュー」にした。彼女は長いフランス生活の中で、著名なフランス人とのつきあいを様々に築いていた。俳優、映画監督、作家、学者、政治家、経営者…毎週一人をスタジオにお呼びし岸さんが対談するのだが、私は普通とは少し違う仕掛けをした。同時通訳を入れるとトークの雰囲気壊す。そこで岸さんには、まずカメラに向かって日本語で「これからこんなことを尋ねてみます」

と言い、それをフランス語で聞く。もちろんフランス語のゲストの答えを岸さんが「いま彼(彼女)はこんな話をしました」と即興で通訳する。岸さんは一言感想を挟んで次の質問に移る。インタビュアー兼即時通訳者を合わせてやったキャスターを私は他に知らない。容易な役回りではないが、岸さんは見事にやってのけた。鋭い感性と理解力、回転の速い表現力、カメラの向こうの視聴者を引きつける雰囲気づくりのセンス。女優と作家、彼女の個性がマッチした絶妙のトーク番組になった。

この番組は87年4月から2年続き、随分すごい方たちが出演された。ジスカール・デスタン前大統領、国境なき医師団のクシュネル医師…圧巻は岸さんが後にエッセイで詳しく書かれたイヴ・モンタンだろう。貧しいイタリア出身の役者としても、幻に終わった大統領候補としても、そして亡くなった女優であり奥様のシモーヌ・シニョレへの深い愛情を語る夫としても。至高のインタビューだった。

私はこの番組開始から半年ほど後に帰国することになり、サン・ルイ島の岸さん宅へお別れのご挨拶に行きました。その日も頬から顎にかけて白いヒゲをはやした彼に会いました。自転車をノンビリ漕ぐ彼とは何回か会い挨拶を交わすようになっていました。ジョルジュ・ムスタキという歌手でした。「私の孤独」という曲を随分聴きましたが、石畳で会う彼は人なつこいオジサンでした。日本に帰ると言う、いつもの笑顔で「そう…お元気で、またね」と答えて自転車を漕いでいきました。岸恵子、ウィークエンド・パリ、サン・ルイ島、ムスタキ。なぜか連鎖する思い出です。(宮崎県立芸術劇場理事長・館長)

世界のクロサワからトットちゃんまで

加藤紀子 (昭50)



1973年に外語を休学し、私は遠戚を頼ってナント大学の「文明講座」に在籍した。翌年のんびり帰国して慌てて就活し、仏語教科書の出版社で働くつもりになっていたところで、学生課の壁の小さな求人票が目についた。「映画・演劇の企画製作会社。黒澤明監督『デルス・ウザーラ』製作中」。演劇には関心があったので応募したところ、すぐに決まった。三次募集までかけ、百数十倍の難関だったと聞かされて教科書会社を断り、私は黒澤明作品のプロデューサー秘書となった。1975年、日ソ合作映画「デルス・ウザーラ」の封切り前で、最初の仕事はソ連の映画大臣宛の手紙を仏語訳することだった。来日した俳優やスタッフと仏語で話し、通訳するのはとても楽しかった。米アカデミー賞にもノミネートされて授賞式にプロデューサーを送り出し、オスカー獲得の報せを受けて直ちに黒澤明監督の記者会見を手配した。仕事を始めた頃の華やかな思い出である。

しかし徐々に私にも、映画製作の大変さが垣間見えてくる。黒澤さん(現場では「黒澤天皇」であったが周りの人はそう呼んでいた)は「デルス」の後、「乱」を書いた。御殿場の別荘にこもって小国英雄、井手雅人両氏と執筆中の監督のもとを、陣中見舞の品を届けに訪れたとき、部屋に入った私は一言も発することができず、黙って鉛筆を削った。井手氏の見事な鉛筆書

きの完成台本を、最初にコピーしたのは私である!

黒澤監督最後の時代劇となる「乱」の製作費はあまりにも高く、出資者を求めてコッポラにもルーカスにも手紙を書いた。後で書かれた「影武者」の方が先に映画化された。(1980年黒澤プロ/東宝。外国版プロデューサー=フランシス・フォード・コッポラ/ジョージ・ルーカス。カンヌ映画祭パルムドール受賞)。「影武者」のクランクインを待つ間にも、黒澤さんはエドガー・アラン・ポー原作の「赤き死の仮面」を元に「黒き死の仮面」を書いた。リアルタイムで2時間に及ぶ機関車の暴走を描いた「暴走機関車」の製作の話も進められていた。が、いずれも映画化されていない。

黒澤監督の成城のお宅に、二つ隣の駅に住んでいた私はよくお使いに行かされた。ある日、「コーヒーでも飲んでく？」と、一人で留守番をしていた監督に座敷に呼ばれた。自らコーヒーをいれてくれて「ノンちゃん(野上照代さん)に頼まれてね、自伝を書いているんだ。そんなもの書くものかと思ってたんだけどね、ルノワール(ジャン)の自伝を読んで書く気になったんだ。黒澤明自伝「蝦蟇の油」執筆のいきさつである。(1984年岩波書店より刊行)ユダヤ系フランス人のセルジュ・シルベルマンが出資することになり、「乱」はついに映画化された。黒澤監督はこの作品を「ライフワーク」と位置づけ、「人類への遺言である」としている。

1982年に辻邦生著「真書の海への旅」をルネ・クレマン監督で映画化する話が持ち上がり、私は現地通信員を兼ねて今度はソルボンヌの文明講座に在籍した。映画化は実現しなかったが、演劇好きの私は、この間演劇の都パリで芝居を見まくった。この経験が今の仕事の糧となっている。現在私が所属する「トッ

ト基金」では、トットちゃんこと理事長黒柳徹子の発案により、ろう者自らが手話で演じる「手話狂言」を創設して国内外で披露している。トット基金は黒柳さんが「窓ぎわのトットちゃん」の印税をもとに立ち上げた社会福祉法人である。「日本ろう者劇団」を擁し、耳の聞こえない俳優たちがさまざまな演劇活動を行っている。中でも古典芸能の強靱さと手話の豊かな表現力を併せ持つ手話狂言は、新しいジャンルの演劇を創ったとして文化庁芸術祭賞も受賞(1987年)、国内外ですでに多くの人に親しまれている。2015年には念願だったパリ公演も実現、日本文化会館のホールを二日間満席にした。手話は国によって異なるため、このときは欧州ろう者の共通言語とされる国際手話を取り入れて上演した。

黒柳さんの慧眼により先駆的な役割を果たしてきたトット基金は、2020年東京オリンピック・パラリンピックを前にこのところ大忙しである。東京都はじめ関係省庁はこぞって障害者の芸術文化活動への支援に力を入れ、「文化オリンピアド」ではさまざまな障害を持つ人々が発信するパフォーマンスが彩りを添えるはずである。障害をポジティブな「個性」と捉える考えも少しずつ浸透し、ITの進化により鑑賞支援も充実してきた。「手話狂言」の公演がお目に留まったら、ぜひ劇場に足を運び、手話が魅力溢れる言語であることを、演劇を通してご覧いただければ幸いである。

東京オリンピックの開会式で、仏語、英語、日本語に続き、手話の「アナウンス」が「目」に入ることを期待しつつ、仲間たちと日々より良い演劇作りに励む今日この頃である。(社会福祉法人トット基金 事務局長)

ケベックのフランス語と言語政策

矢頭典枝 (昭61)



私はフランスには旅行で数回訪れた程度ですが、カナダのケベック州とは深い、そして長い縁があります。私がケベック州の最大の商業都市モントリオールを初めて訪れたのは、1968年、ちょうど50年前でした。このように書くと、私がかんりの高齢者だと思われるかもしれませんが、そのとき私はまだ5歳でした。幼少の頃に住んでいたトロントから、家族全員で両親が仲良くしていた日系の友人家族の家に遊びに行ったのです。トロントは英語圏ですので、私の第一言語は英語でした。ケベック州は当時も今もフランス語を母語とする人々（カナダでは「フランコフォン francophone」と言っています）が80%以上を占めるカナダで唯一のフランス語圏です。その後もたびたびモントリオールを訪れましたが、その日系人家族の家庭内言語も英語でしたし、外でも多数派がフランコフォンであることを感じさせない街でした。当時のモントリオールの街中の写真をみれば英語の看板が氾濫し、商業施設やレストランに入れば英語で応対されるなど、英語が支配言語でした。

この状況がひっくり返ったのが「フランス語憲章」が制定された1977年でした。同憲章は制定当時214もの条項から成り、ケベック州におけるフランス語の優位性を確立する世界でも類稀な言語法です。その適用範囲は、カナダの国家レベルの公用語政策と異なり、公的部門（州レベルの立法・司法・行政）

仏語弁論大会出場からブルシエに

今井正幸 (昭36)



これはもう、とても古い話ですが、その後の私の生き方を方向付けたスタートなので、記憶に鮮明に残っています。こんな些細な自慢話を、ライフワークとして仏語をキャリアに生かしておられる皆さんに披露するのは冷汗三斗の思いがしますが、ホントの話なので悪びれずに語ることにします。

1969年と言えば約半世紀前のある日、朝日新聞の第1回仏語弁論大会の広告を目にしました。前年フランスのINSEAD（ビジネススクール・経営大学院）への就学の機会を5月革命の影響でパイにし、もう渡仏もかの地で学ぶことも諦めていたのですが、これは面白いと好奇心に駆られて応募したのです。日比谷公園で応募論文を書き上げフランス人に見てもらってから提出すると間もなくパスの通知が来ました。「全国から出来る輩が集まるのだから、お前なんか全然だめだよ」と何でも明け透けに言う先輩には「いえ、遊びですから」と軽く答えました。

弁士は15人（後に300人前後の応募者があったと聞きました）。コンクール前の説明では、各人は自分の前の弁士がスピーチを行う10分間に舞台裏で与えられる二つの課題から一つを選び自分の弁論の草稿を作る。またスピーチ中に原稿に目をやるのは減点の対象になるというものでした。これは「原稿がなければスピーチができない」とする日本側と「即興でなければ

外語大とフランスと私の仕事－外語の恩恵

谷川多佳子 (昭47)



入学は昭和42年、卒業は47年だった。初めと終わり以外は大学での勉強がそれほどなくて、大学院へ進んだ。一時、言語学かフランス語学を考えたが、結局、卒論はデカルトになり、現代思想にも興味が湧いていて、当時はまだ翻訳もなかったフーコーやデリダと関連づけるものとなった。精神分析にも関心があり、医学部の友人たちとフロイトを読んだり、自分でラカンを読んだりもした。

院に入ってフランス留学を勧められた。テーマはデカルトにしても現代思想や言語学との関連があり、留学先を決められないでいた。たまたま外語大でセミナーを持っていたフランソワーズ・ルヴァイアン（ヴィル）と知り合った。アグレジェ1番の秀才とかで先生方の話題になっていたが、現代美術、特にシュルレアリスムを専門とし、エコル・ノルマル出身で豊かな教養のある人だった。私のテーマとその困難さを理解してくれ、私の留学と同じ頃パリに戻り、お父様のジャン・ルヴァイアンも相談ののってくださり、指導教官を決めることができた。

指導教官はイヴォン・ベラヴァルというソルボンヌの先生だったが、エコル・ノルマル系のエリートが多いフランスの大学では異色の存在で、父親の早世で貧しい母子家庭に育ち、船員や税関職員などを経て、29歳から哲学を始め、ほぼ独学に近い。学問的な出発が遅かったが、50歳で出した博士論文が、ル・モ

だけでなく、教育の言語、民間企業・個人事業・各種専門職の仕事言語、商業用看板や広告の表示言語などケベック州の隅々にまで及ぶものです。同憲章が制定されるまでは、ケベック州に定着する移民たちは、フランス語よりも英語を重視し、子供たちを英語系の学校に通学させるのが普通でした。同憲章制定後は、移民の子供たちはフランス語系の初等・中等学校に通うことが義務付けられました。大規模な商業施設や飲食店の商業用看板や広告の多くは、モントリオールでは英語表記で出されていましたが、同憲章制定後、フランス語のみによる表記が義務付けられました。同憲章が最も重要視したのは「仕事言語」のフランス語化です。民間企業、特に大規模な企業を対象として、これらがフランス語を業務言語としない場合、「フランス語化プログラム」がケベック州政府管轄下の「フランス語局」の指導のもとで行われました。また、同憲章は、医師、看護師、弁護士などの専門職に就いている人々に対しては「職務を遂行できる程度のフランス語の知識がある者にものみ免状を授与する」（同憲章第35条）、と規定しました。

フランス語憲章はケベック州に住む英語を母語とする人々（「アングロフォン anglophone」）に衝撃を与え、同憲章制定直後の5年間だけでも30万人以上のアングロフォンがケベック州外に流出しました。先述の日系人家族の3人の子供たちも学校卒業後、それぞれトロント、カルガリー、バンクーバーに仕事を求め、出ていきました。「フランス語局」の検査員（アングロフォンたちに「言語警察」と揶揄された人々）が、英語を業務言語とする民間企業に踏み込んで検査し、英語のみの店の看板を掲げ続けるアングロフォン事業主にフランス語の看板に変えるように指示し、それに対するアングロフォンたちの凄まじい抵抗、抗議活動、訴訟をめぐる言語闘争が毎日メディアで報

スピーチにならない」というフランス側の審査員の意見の折衷案として考案されたもので、なかなか当を得たものだと感じました。

舞台は朝日新聞社の1階大講堂。夕方開かれた会場は1000人以上の観客で超満員。催し物の性質からか女性が大多数でした。4番目の弁士として会場に入った私に舞台裏で与えられた課題の一つは「東京は美しい街ですか」。ダメだ。ダメだ。これをフランス人に説くのは難しい。もう一つは「大戦後の日本の経済復興の要因は貴殿の意見では何ですか」。しめしめ、これだと自らを納得させて思いつくままに書き連ねました。もちろん弁論の中身は忘れましたが、50年近く脳裏に残っているのは次の一節です。「隣人の不幸を利用するのはなんと不道徳なことでしょう。しかし実際は、独立後の朝鮮に戦争が起こったことを機会に日本経済は復興の緒についたのです」と。そして、なんとということか、それ以来私の書くものは「80年代初めのエジプトの経済回復」から「ユーロの危機からの回復」とredressementを多用すること甚だしいのです。これはどうもこの時の弁論大会課題が起原らしく思われます。

審査結果が発表されました。審査員の反応から、私が「貴女が1位ですよ」と話しかけていた大阪外語大4年の女子学生が優勝し、1年間のフランス留学の権利を得、私は2位でした。発表後、ロビーで不思議な場面に出くわしました。審査員は4名、日本人男性3名（新聞社と大学の若い先生）と紅一点のマダム・ラガッシュ。一橋大教授で作家のなだいなだ夫人です。司会者は仏語講座で周知の東大の小林正先生でしたが、票が2対2と割れた時だけ介入するという約束だったらしいです。ラガッシュ夫人は私に「審査はとても難しかったの。ごめんなさいね」と。これはいったいなんだろう？小林先生もすれ違う際

ンドで1ページを割いて絶賛されるほど評価されて、ソルボンヌのトップのポストに上った。哲学教師よりも詩人になりたかった、といつも愚痴のようなことを言っておられ、孤独な青春の時期、文学や哲学を読み耽り、そのなかのラフカディオ・ハーンから日本のイメージを得た、とのこと。

フランソワーズ・ルヴァイアンとはその後もコンサートに行ったり、ヴァカンスや旅行を共にするなど、終生の友人となった。今でも研究上のアドヴァイスをもらっている。

仕事の恩恵をうけた一人に、外語の後輩、小口（粒良）未散さんがいる。田島先生や朝倉先生、渡瀬先生と食事をご一緒したこともあり、岩崎先生や二宮先生と共にお話しする機会もあった。院の中途から岩波書店に勤めた彼女は、私の仕事を見守ってくれた。パリまで来て私の指導教官ベラヴァル先生にも会い、一緒にお茶をご馳走になったのは楽しい思い出である。PTAのような後輩だったように憶えている。帰国後、『思想』への寄稿を勧め、著書の刊行にも力を尽くしてくれた。お陰で岩波文庫も何冊か依頼され今日に至っている。

先生方の恩恵も大きい。入学後、オーディオヴィジュアルの30人くらいのクラスで、朝倉先生と渡瀬先生が担任で、よくクラスのコンパがあり、文集を作ったり、人間関係がとても親密で、今に至ってもその痕跡が残っている。学問的にも、言語学に興味を抱いて渡瀬先生の教えを受けたし、朝倉先生にはその後デカルトを研究の中心としたため指導教官をお願いし、その後の学界活動まで終始ご指導をいただいた。篠田先生とも、現代思想に興味を持ちずいぶんとお話しでき、そこからデカルトへ移っていくに際し貴重なアドヴァイスをいただいた。岩崎先生にも演習で教えをいただき、率直に文学の様々なことを語り合えた

道されていました。

こうしたケベック州の言語政策に私が興味を持ったのはフランス語学科を卒業し、大学院に入学した1980年代の後半、モントリオール大学に留学したときでした。フランス系カナダの歴史と政治（特に「ケベック問題」）を勉強するための留学でしたが、当時のケベック州の激しい言語論争を目の当たりにし、結局、帰国して提出した修士論文はケベック州の言語政策をテーマとしました。

その後、1990年代後半に外務省の専門調査員としてオタワの日本国大使館で勤務し、「ケベック問題」を中心とするカナダの内政に関する調査が私の任務でしたが、その任務の一環としてケベック州の言語政策の成り行きに注目していました。1990年代は、フランス語憲章に大きな修正が加えられ、商業用看板や広告についてはフランス語と他の言語（ほとんどの場合、英語）のバイリンガル表記が容認されましたが、バイリンガル表記とするならフランス語の文字の方を大きくすることが条件です。しかし、移民の子供たちの教育言語と民間企業や専門職の仕事言語については手綱を緩めていません。修正後のフランス語憲章は幅広くケベック州民に支持され、フランス語の優位性が確立し、フランス語憲章制定後に生まれた世代が中堅になってきた現在、フランス語がケベック州の共通語として機能し、「真の多数派」となったフランコフォンの英語に対する寛容な姿勢も見られます。

研究者となり、こうしたケベック州のフランス語と言語政策についていろいろと出版しました。詳しくは、一般向けに書いた図書として『ケベックを知るための54章』（明石書店、2009年）の第21章と第22章を参照していただければ幸いです。

（神田外国語大学准教授）

「審査は極めて難航した。だが新聞社だからね」とつぶやかれたのです。翌日の朝日新聞には「優勝者は大阪万博でコンパニオンとして活躍予定」と若い彼女が報道されていました。「これによし。万一自分が賞を貰ったら難しい問題に直面する。社外的好评を敵視するあの人事の年寄は必ず、賞を受けるなら会社を辞めると言うだろう」こうして幕は下りました。

表彰式の後、1人の堂々たる紳士が近づいてこられ「君はもうフランスで学ぶ資格が十分ある。私のところに話に来給え」と。ムッシュ・シェール、仏大使館のナンバー2の文化参事官でした。そしてシェール氏を訪れて、その問いにいくつか説明したところ「お前はなぜ仏政府給費留学生試験を受けないのか？」と。私は「私が民間企業勤務なので、日本の試験官は私を受け入れてくれないのです」と答えました。これに対する彼の名科白は今も覚えています。「日本の試験官が何と言おうと奨学金はフランス政府が出すのだ。受けなさい！」「ハイ！畏まりました」こうして試験を受けることに。試験官は野田先生の後任のフランス法の山本教授でした。「コンセイユ・デタ」は知っているかね？。ああ、前回の試験でその判例をレジメにしたのを仏試験官に満足してもらったのを思い出し答えようとすると、それを遮って「君はもう法律は忘れただろう」これだけでした。あの雰囲気にはシェール氏の威光が及んでいるのだなという思いがしました。念願かかってブルシエの資格を得て渡仏しました。幕は下りてまた上がったのです。

そしてその後、ソルボンヌ大学で老大家ルデュック教授の愛顧を受け、また後にギリシャの副首相となって活躍した兄貴分の助手パンガロス氏の勧めなどによって遮二無二励み、博士号を授与されたのは1976年の春でした。

（日本ビジネス・インテリジェンス協会理事）

のは、今でも印象的だ。田島先生とはよくお食事やお酒をご一緒した。他の先生方もそうで、どの先生のお宅へもお邪魔したり招いてくださったりした経験があり、学部時代からのいい意味でこじんまりした親密な関係は今から思うと本当にありがたかった。こうした雰囲気や関係を作り出してくださった元はやはり田島先生のオーガナイズの能力とご配慮が、学科の根本をなしていたように思われる。またパリで留学中、おいでになる先生方はいつも食事をご馳走してくださり、いろいろな方を紹介してくださり…でありがたかった。田島先生の紹介してくださった外語の女子の一期生ブリュネさんとは今に至るまで親交が続いている。

最後になるが学問的には二宮先生の恩恵が深かった。初めのフランス留学についてもいろいろと考えてくださり、フランソワーズ・ルヴァイアンも、彼女のご主人と一緒に食事に招いてくださるなど、今にして思うと彼女と親しくなれるようご配慮をしてくださったのだろう。パリでの博士論文準備中、壁にぶつかることが何度もあったが、お手紙を出すといつもお返事をくださった。結果的に先生のお時間と体力を奪ったかもしれない、と今になって気がついている。なお二宮先生の御蔵書は筑波大学に寄贈いただき、16-18世紀刊行の貴重本は大学の中央図書館だが、それ以外の本は先生の書斎そのままの配列で、筑波大学の東京キャンパス大塚図書館に二宮文庫として配架されていて、ここは誰でも図書館入り口で名前と住所を記入すれば入館できる。

思いつくままに書いてみると、私の仕事と生涯に外語の恩恵がいかに大きかったかが実感されてくる。

（筑波大学名誉教授）

《パリ便り》 パリ大好き人間

吉澤雅樹（平 11）

外大を卒業しパリに来たのは99年、早くも20年近く、人生の半分近くをパリで過ごしたことになります。

パリに住んでみたいと最初に思ったのは、東京都から友好都市であるパリに短期留学生として派遣された高校2年の時でした。NYや北京、ソウルなど他の都市では高校生のいる家庭にホームステイをし毎日通学する、というのが基本のプログラムでしたが、パリでは一転、ホームステイはたった2泊程、高校へ行ったのは1日のみで、残りはベルサイユ宮殿や幾つもの美術館等いわゆる観光スポットの見学、フレンチのフルコースを堪能といった次第で、その辺りもフランスっぽいのかと感じたり、市庁舎でのレセプションでは高校生の我々にもシャンパンが振舞われたり（フランスでは合法のようですが）、またかわいい女の子ともビズができたりと良いことが沢山。もともと小学生の頃から、夏休みに北米や欧州へ家族と行く度に、海外に住んでみたいなど思っていたのが、この経験で海外に住むならパリに！となったのでした。

外大を卒業したら就職しその上で仕事のためにパリに行く、という選択肢もあったのですが、私の場合は少々せっかちであったのと、また日系の企業では人事の権限が強大であるのに比べ、フランスの場合は比較的自分次第、自己責任でキャリ

アを築けるというようなことを見聞きしたこともあったため、まずは複数の企業研修も必須になっているパリのビジネススクール（ESCP）へ留学することにしました。

思い返せば家族には2年間留学します、と言って渡仏したのに、1年休学して監査法人で10か月の研修をしたため留学期間は3年となり、2つ目の研修はBNPパリバの東京で6か月（M&Aアドバイザー部門、退社が平均夜中過ぎ…）。こうしてパリ・東京での職務経験を比較した結果、正規採用での最初のポジションはまずBNPパリバの本店にしたのでパリ滞在が更に数年延び、その後も異動の度、もう少しパリで頑張りたい、を繰り返した結果今に至っています。10年が過ぎたあたりで家族はもう帰ってこないと言ったようで、私自身、パリに住みたいと思ったとはいえ初めから一生ずっと、などとは考えていませんでしたが、最近になってもしかしたらずっとになるのかも、と感じ始めています。

パリで生活する、仕事をするというのは正直大変な面も多々あります（実は執筆依頼を受けた際、ちょうど新居を購入したところだったのでそれをテーマにしようとも思いましたが、嫌な経験が多すぎフランスの不動産ネガティブキャンペーンになりそうだったので止めました）。ただ良い面も沢山あります。あくまでも主観ですが、私にとって一番大きいのは自分に選択肢があること、あると感じられることでしょうか。プライベートでも私の場合は、フランスでは他人への干渉がそれ程でもないように感じられ、受身でなく主体的に交友関係が持っています。

日仏交流 — Les Âmes en Résonance —

櫻井友行（昭 50）

諸外国との文化交流でも、ことフランスとなると特別に濃厚な関係を感じます。19世紀のジャポニズムもそうですし、戦後の象徴的な一例を挙げますと、1964年に東京、京都で開かれたミロのヴィーナス展です。東京オリンピック開催に向けてギリシャ由来の美神の出品交渉は当時難航を極めました。日本側の熱意と懸命な働きかけによりルーブル美術館は遂に例外中の例外として門外不出のヴィーナスを日本に貸与してくれました。

オープニングで来日したポンピドー大統領は「死すべき人間よ、われは美わし、石の夢のように…」というボードレールの詩を引きながら美神を称え、「いつの日か法隆寺の百済観音をルーブルに迎えたい」と結びました。1972年に発足した国際交流基金※が、これに応じてルーブル美術館で国宝「百済観音」展を主催したのは「フランスにおける日本年」がフランス全土で開催された1997年のことでした。

思えば基金の草創期を色濃く特徴付けているのも、初代理事長、今日出海氏のイニシヤティブによる対仏事業です。基金が初めて海外で国宝を出品した本格的な美術展は、パリのプチパレ美術館で唐招提寺秘蔵の国宝「鑑真和上坐像」を展示した時です。また世界の知識層との絆を深めるために開始した特別客員文化人招聘計画の第一号はフランスの小説家で文化相も務めたアンドレ・マルローでした。（余談ですが、私が昔学生時代に読んだA.ジードの「田園交響楽」は今氏の翻訳によるものでした。）

時は流れ東京での二回目のオリンピック・パラリンピックを二年後に控える本年は、日仏友好160周年にあたり、安倍総理とオランダ大統領（当時）の合意により大規模な複合型文化イベントが7月から実施されます。称して「ジャポニズム2018：響きあう魂」。約8か月間の会期中に、パリ市内を中心に縄文から伊藤若冲、琳派、そして最新のメディア・アートや日本映

画の名作の上映まで、また歌舞伎から現代演劇や初音ミクまで、さらには食や祭りなど日本人の日常生活も包含して豊かな日本文化の多様性を一挙に紹介します。国際交流基金はパリのセーヌ川沿いの一等地に設けた海外拠点としては最大規模のパリ日本文化会館と連携を図りながら、これらの多彩な事業の企画・立案から実施まで事務局として大役を担うことになりました。

古来から日本文化の基層に脈々と流れてきた、異なる価値観との調和を尊ぶ「美意識」をフランスの地において提示すること。また日本とフランスの感性が共鳴しあうことにより、あらたな文化を21世紀の国際社会に向けて創造してゆくこと。この基本コンセプトが今日まで築き上げてきたフランスとの緊密なネットワークの延長上に鮮やかに開花したら、これは実にすばらしいことだと思います。（国際交流基金理事）

※国際交流基金 外務省が所管する独立行政法人で、世界の全地域において総合的な文化交流事業を実施している。文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流の三つの分野を活動の柱としている。国別予算実績ではフランスは、米国、インドネシア、中国に次いで世界第4位（2016年度）。

2017年度95回外語祭

フランス語劇「Notre-Dame de Paris」観賞記

西田紀男（昭 45）

11月24日（金）、大学キャンパスのアゴラ・グローバル内のプロメテウス・ホールで上演されたフランス語劇を仏友会の仲間と観賞した。平日のせいか、観客の入りは例年ほどではなかったが、フランス語科2年生全員（60名）による「Notre-dame de Paris」は、あっという間に終わったような気がする。

粗筋は皆さんご存知の通り、美しいジプシー娘エスメラルダをめぐる愛の物語だ。背むしで耳の聞こえない鐘撞き男カジモド、自分を拒絶する彼女を処刑させる助祭長フロロ、彼女が心惹かれる騎士フェビュスも、それぞれが役になり切り若さ溢れる演技を披露していた。エスメラルダがヤギを引き連れて踊るシーンは、実は、エスメラルダ役（兼代表）の杉本玲子（写真

べ放題ミルクホールはあるしで、何もかもがノンビリしててありがたく、雨の日の昼休みなどには酒の礼讃談義を面白く聴いたりした。要するに外語の学生時代には何一つ暗い思ひ出といふものがなく（中略）教壇生活の前半は愉しく過ぎたものが、日支事変（日中戦争）が起る前後から非民主化させられてゆき、顧みてはほほえましい思ひ出というもの一つもなくなったと云えるであろう。この会報には以下の匿名寄稿もある。＜先輩諸氏の中には「外語」について多くを語ることを好まない向きもあるように聞いた。いろいろのことがあったのだと思う。我々は外語を愛する。その心のたけをさらけ出してみたい気がするが、これは控えるべきだろう。外語に入って日も浅く、実感をかみしめる時間をさらに必要とするからだ。旧東京外語は昭和24年国立学校設置法によって東京外語大学となった。入学に際して外語の系譜をたどられたことを覚えている。それは遠く明治30年をとおこえて貞享元年「天文方」に及ぶものであった。外語は落ちぶれて新制大学になったけれども、そのご先祖はかくも立派なものだったというわけだ。まさしく過去における外語の華やかな発展は、祖国のその姿であった。国破れて後、新生外語の発展は、又祖国のそれに準ずる。が、こ

また職場ではキャリアは自分次第で切り開くことができ（いわゆる就職活動を自身で行内においてすることになります）、そのおかげで検査部、審査部、リスク戦略部といった管理部門を経て2010年には今も勤務している法人営業部へ異動することができました。東京支店でのものも含めポジションのオファーを何度もお断りしても、こうしてパリで経験を積み続けられ（日本の友人からは窓際に送られないのかと心配されましたが）、感謝しています。

加えて結局、私はパリが大好きなんです。街並みが大好きなので散歩も楽しく、またここ数年はオペラ・バレエ熱に浮かされていて週末を中心にほぼ毎週、年間50日以上はオペラ座へ通っています。職場がガルニエ宮のすぐ近くなので、残業で疲れた寒い日の退社時でも、華やかにライトアップされた姿を外から見るだけで元気づけられたり。美味しい食事やワイン、どこかで常にある展覧会なども含め、私にとってパリは嫌なことや疲れを吹き飛ばす、少なくとも軽減してくれる要素が沢山ある街です。

私は日本も大好きなので、パリで仕事をしているおかげで休暇がフランス式であるのも大変ありがたいところ。毎年しっかり夏、冬と2度、平均3週間ずつ帰国しても有給はまだ残る程、多すぎて完全消化はなかなかできません。因みに、仕事のフローは休み中にもあるので休暇中でもそれなりの時間を仕事に割いています（日本人魂なのか、休みが多い話で罪悪感らしきものを感じたので追加しました）。

後列中央）さんではなく、元々バレエを習っていたという飯塚遥さんだが、人物が入り替わったと見抜いた観客は少なかったかもしれない。誠に華麗でうっとりさせる踊りであった。最後は、「後年エスメラルダの墓を掘り返すと、彼女の白骨にいびつな形をした白骨が絡みついていた、多分カジモドの骨であろう」という滑らかなナレーションで幕が下りるのが、耳に心地よかった。Bravo! の声もあがった。

舞台装置は極めて簡素だが、まず流暢で落ち着いたあるナレーションが物語をスムーズに運んでくれた。音楽と照明はそのシーンに合った雰囲気盛り上げる効果をほどよく出して、場を盛り上げていた。そして何よりも、一人一人の演技者の熱の入れように好感が持てた。特に、フランス語の持つ美しい響きを最大に引き出そうという意図が監督にあったに違いない。リールからの交換留学生2人とたまたま話す機会があったが、この2人が発音・発声を指導したとのこと。それで「出来栄はどうだった？」と聞いたら、「Superbe!」と返ってきた。

このVictor Hugoの大作を50分で上演する大胆さに驚いたが、こうしてうまくまとめ上げた脚本担当者にも拍手を送りたい。語劇終了後、藤倉会長（写真前列左から2人目）より仏友会からのお祝い金が杉本代表に手渡され、アゴラ・グローバルの前で記念撮影をして、語劇の成功を皆で喜んだ。

遠い昔、映画「ノートルダムの背むし男」を見たが、見るからにぞっとするような背むし男の醜い顔だけはよく覚えている。今回の語劇のカジモドは好男子すぎるのがちょっと気になったが、これもご愛嬌というものだろう。学生の皆さん、お疲れさまでした。（11月28日記）



キャスト・スタッフらと（前列中央が筆者）

昔日の青春 佛友會々報 80年のタイムカプセルを開ける 15

坂井英俊（昭 40）

＜歩み豊かに行きこうは故山に飾る錦町、ランゲイジスクールのスチューデント、片手に下げたラケット、歌うソングはニイチェスカ、シューズははやりのマッキンレー、戴くハットにシルヴァーライトのシャイニング＞これは増田先生、昭和26年の投稿である。

＜夜の神田あたりの散歩のおりにこの歌が歌売り男の口から流れてくるのを聞いた昔がなつかしい。この歌は当時（日中戦争以前）の東京のおもな学校を歌ったものの中で、外語のそれとしていまだにそのリズムもともと脳裏を去りやらずである。作者は誰か知らないが、いやに英語の単語が多いのは外語に敬意を表してのことであろう。とにかく明治の末期、外語の学生は、お向こうの高等商業（のち一橋大）の学生以上に時代の先端をゆくハイカラ学生気取りで黄塵の街々を自負闊歩したものである。体操の時間には十分ぐらい駆け足をして放免になるし、休講や休暇は多いし、九段下には牛乳一杯飲めばビスケット食

こに我々の決意がある。外語は受験界で単独昇進した。おのずから過去の外語がまさに外語であった。今も国立大学第二期募集中の白眉と目されていることは、言うをまたぬ。スペイン語科の競争率が年とともに激烈さを加えている。＞

日中戦争以前の学園生活には＜何一つ暗い思ひ出といふものがなかった＞と増田先生は昔を回顧するが、日中開戦以降のありさまには＜顧みてほほえましい思ひ出は一つもなかった＞と嫌悪する。軍部の言論統制への宿怨であろうか。匿名氏は＜外語について多くを語るを好まない先輩には、いろいろのことがあったのだろう＞という寂しい思惑を越えて＜我々は外語を愛する＞＜過去の外語がまさに外語であった、過去における外語の華やかな発展は祖国のその姿であった＞と、さながら壇之浦の知盛が天に絶叫するかのよう無念の思いを焦がし、戦には敗れたが＜ここに我々の決意がある＞と心機一転する青年らしい悲壮な宣言には、新たに来る復興の困難を克服せんとする日本人の誇り高い魂魄が見えている。事実その後の見事な復興は世界を驚嘆させるのである。＜次回へつづく＞